

授業、探究、地域連携…
学びを進化させる

— 今できること、今だからここで考えたいこと

探究

田村学（國學院大學人間開発学部 教授）

答えのない課題に対して最適解を導き出すことが
「探究」という学びの一つの目的。まさに今、その力が試されている

今のような困難な状況に

立ち向かうために「探究」はある

学校で「探究」が求められるのはなぜか。簡単に言えば、「変化の激しい社会における正解のない複雑な課題に対して、知識をフル活用し、自ら考え判断し、他者と協働しながら最適解、納得解を導き、行動する力」が求められるからです。まさにそれがつきつけられたのが今回の新型コロナウイルスの感染拡大でした。「変化の激しい社会」といった言葉が悠長に感じられるくらい、深刻で答えの見えない課題です。

高校生の目には、変化に対応しきれず右往左往している大人の姿だけではなく、医療従事者をはじめとしたさまざまな人々が力を合わせ、アクションを起こしている様子が焼きついたで

しょう。自分自身、どう対峙すればいいかを日々考え、行動に移した生徒も多いはず。「学校に集まって勉強する」という価値があるのか」「自分には何ができるだろう」という思索も巡らしたと思います。それも一つの探究であり、数カ月前とは違う学習者としての姿勢をもったと思うのです。

だとするならば、学校が再開された瞬間、「社会課題の解決など先のことだから、まずは受験に向けて問題集を解きなさい」というのは、普通に考えて成り立ちません。現実の課題に目をつぶる学校は、ポストコロナの社会を生き残れないとさえ思います。

もちろん、どのようにカリキュラムを組み直し、学びを進めるかといった現実的な問題はあります。ただ、「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」

「まとめ・表現」という探究のプロセスを回すことで構造化された知識は先々まで定着することは明らか。一夜漬けで覚えた知識はすぐに忘れさられてしまうのとは対照的です。

オンラインも活用しながら

探究プロセスを回す

探究が必要とはいえ、人と密に関わる学びはできません。そのためオンラインの活用が一つのポイントになります。例えば「課題の設定」や「情報の収集」においては、資料にあたるだけでなく、関係者の話を聞くことが大切であり、その点オンラインを使うことで

物理的な制約なく社会課題に取り組む専門家などから話を聞くことも可能になりました。教室になじめなかった生徒がオンラインだと発言しやすいこともあるでしょう。

特に「課題の設定」は、その後の進路にまで影響を与えるため、これまで時間をかけ、問いが生まれてくるのを待つていたところもありました。ところが今回、そうした余裕がないわけです。そのため教師の意図的な働きかけが、より求められます。生徒の関心に合わせた、あるいは微妙にズレを生むような声かけを行い、内なる問いが顕在化するように設計をする必要



もあるでしょう。特に今は、コロナが自分のペースや興味関心にかかしの影響を与えているでしょうから、そこを切り口にするのもありだと思います。

3密回避下での探究でカギとなるのが「文字言語」

学校内での探究にも工夫が求められます。例えば「整理・分析」では、これまで生徒同士での対話を重視してきましたが、それが難しい状況です。とはいえ、クラスサイズを小さくしたうえで、先生を中心に皆が前を向いた状態でも話し合いは成り立つと思います。一人ひとりがおもちゃつた情報を「粒」と捉えたとき、クラス全体で共有すれば、ある程度の数になります。それぞれの「粒」がどういう関係性になっているかを黒板上で見える化し、全員で整理・分析を進めていくのです。一方、個人で整理・分析をするときの処理スペースはノート。ここでも同様、自分が見える化し構造化していきます。その際、役立つのがベン図やピラミッドチャートといった思考ツール。「この図を使えば比較がわかりやすくなるし、このチャートを使えば雑多な情報がまとまるぞ」と説明すれば、高校生は使いこなしてくれるはず。先生方の板書やノート指導の力が問われることになるでしょう。

大切なのは、生徒がもつ既存の知識や、教師が供給する新たな知識を「粒」と捉え、並び替えたりカテゴライズしたりしながら「塊」にしていく発想。より精密で強固な知識とするのです。

3密を避ける状況において、音声言語に替わって重視すべきは「文字言語」だと思います。音声は、広がりやすい一方、文字は自覚しやすく、安定性があります。書くことを意識した指導ができれば、今まで以上に知識の構造化や概念化ができ、深い学びが生まれるのではと期待しています。

カリキュラム・マネジメントの核としての総合的な探究の時間

今回の学習指導要領ではカリキュラム・マネジメントの重要性が強調され、その中核に総合的な探究の時間が位置づけられています。今の状況こそ、カリマネが求められるのではないのでしょうか。というのも、教育課程とは学習指導要領で示された学習の「内容」と「時間」で編成されるわけですが、今回、時間が圧縮されたことで、内容をどう配列し、どこに重きをかけるかを考えざるを得ません。これまで以上に意図的である必要があるのです。加えて、第2波・第3波を予見して、カリキュラムを柔軟に組み替えられるような心

たむら・まなぶ ●1962年生まれ。新潟大学教育学部卒業後、上越市立大手町小学校教員、上越教育大学附属小学校教員、新潟県柏崎市教育委員会指導主事などを経て、2005年に文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官(国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官を併任)。15年文部科学省初等中等教育局視学官として新学習指導要領作成に携わる。17年4月より國學院大学人間開発学部初等教育学科 教授。

積りも必要になります。

この数カ月間、多くの高校生が本気になって考え、いろいろなつながりを感じることで、学習者として大きく成長していると同時に、社会の力にもなっていると思います。高校の探究は、小・中学校から続く探究的な学習の集大成。未来社会を創造する主体＝Agencyを育てる意味において、カリキュラム上、探究活動が担保されている意味は大きいと思うのです。

今回ほど、学校教育が社会でクローアップされたことはありません。休

右往左往する大人がいる一方
行動を起こす専門家たちの姿を見て
高校生は何を感じたか



校当初は「休めてラッキー」と思ったと

しても、時間の経過とともに、「早く学校に行きたい。友達と勉強したい」と語る生徒が増えてきたことはニューズから伝わってきましたし、私自身、休校中につながりを持ち続けたゼミ生からも感じました。共に学びを深めていくという学校教育の価値が再評価されたことは、大変な日常が続くなかでの希望です。同時に、今後、若者がポストコロナ社会をつくっていくうえで、学校教育のもつ責任の重さを再認識する必要があると感じています。